

幼児期の遊びと学習に関する一考察

A Consideration on Play and Learning in Early Childhood

菅 野 幸 宏*

Yukihiro KANNO*

論文要旨

本論では、幼児期の学習（早期教育即ち知的に偏った早期学習の隆盛、早期教育的雰囲気（マインドセット）の蔓延）という問題を介在させながら、幼児の遊び（遊びの機会の減少、屋内での孤立型の遊びの隆盛、遊びの情報化（疑似体験化、虚構化）と親の在り方（遊ばない親・遊ばせない親）との関連を問題にし、幼児教育の置かれている現状をとらえようとした。そのために弘前市内の2幼稚園に通う園児たちの養育者に対して質問紙調査を行った。結果として、遊ばない父親が多いこと、習い事は首都圏ほど盛んとは言えないこと、親の「高度学習」と「要学習塾」という考え方（本文参照）が子の習い事と関連すること、親の「自由遊び」という考え方が子の屋外遊び、自然にふれる遊びと関連することなどが見出された。

キーワード：幼児、遊び、早期教育、親の教育認識

目 的

平成10年中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」答申¹⁾（以後単に答申と呼ぶ）によると、現状において遊びはその機会が減少し、屋内での孤立型の遊びが目立つとされ、懸念されている状況である。須藤（1991）⁴⁾が1970年代終わり頃からの子どもの遊びの特徴を遊びの商品化と情報化（疑似体験化、虚構化）としてとらえ、現代の子どもには自然の中で仲間と群れをなしての遊びが失われていることを指摘したのも同様の趣旨と解される。自然の中では子どもが主体となって遊び道具やルールを創り出し、つまりは遊びそのものを創り出していくことができる。したがって、自然の中の遊びは答申で言う「生きる力」の中核にある「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考える力」に深く関連していると言えよう。そこで、屋外で遊ぶ楽しさを十分感じ取ることができるような環境づくりが大人に求められるが、実はここにも問題がある。即ち、答申の懸念は、子どもの遊びの実態のみならず、同時にその背後にいる親の遊びへの態度などにも及んでおり、「遊ばせない親」、「子どもと遊べない親」の存在をも

危惧したものである。この点については「早期教育」の隆盛が深く関わっているように思われる。

早期教育とは何を指すのであろうか。無藤（1998）⁷⁾によると、早期教育とは乳幼児期の子どもに小学校以降の学校教育に類した方式や目標を持って意図的に教育するもの、であり、これには胎教や乳児向けの教育、読み書き・算数などの教育、英語教育、ピアノなどのお稽古事、水泳などのスポーツ教室が挙げられている。そして、こうした早期教育の問題点について、無藤は「多くの早期教育が特定の子どもの見方、特に知識伝達・暗記型に偏っていること」を挙げ、加藤（1995）²⁾は、生活体験から遊離した知識を受動的に学習させられることからくる知の構造の不均衡並びに従順なよい子として幼児期を過ごすことによる自分づくりとコミュニケーション能力面での障害を挙げている。また、高良（1996）⁵⁾は、早期教育には「もっともっと」という強迫性と我が子を抜きんでさせようとして少しでも早くから知的教育を受けさせようとする他者との競争原理、自発性剥奪状況、母親からの支配・服従性、父親不在といった要素から成る「早期教育的雰囲気」に陥りやすい危険性があると指摘している。つまり、この早

* 弘前大学教育学部幼児教育学科教室

Department of Preschool Education, Faculty of Education, Hirosaki University

* 本調査は研究生（当時）都小京と共同で行われ、資料の自由な利用を相互に可能とすることで合意している。

期教育的雰囲気は子どもへの圧力となり、遊びなどの時間を奪いかねない面をもっているということである。

遊びが貧困であってはいけない理由があろうか。無藤 (1998)⁷⁾によると、遊びの根底には、気分や活動の流れ、また相手の人や物の動きに応じていかようにも変更できる自由さが豊富にあり、この自由さの中で現在起こることへの没入、新しいことへの心の開放と臨機応変の動きが生まれると言う。こうして、遊ぶ子どもは強い実在感をもって対象に関わり、人と同じことをしたり共感しあうという対人関係の最も基本的な在り方を体験することができる。加えて、遊びにおいては一喜一憂の楽しさとムキになりすぎない冷静さ、相手を出し抜く興奮とルールの尊重、思いがけない展開に身を任せるスリルと遊びの成り行きを見通した安心感といった、自由と規制の両面があり、自己統制力を育てる機会が豊富にある。⁷⁾平成10年告示の幼稚園教育要領において、自主的活動としての遊びは幼児期の発達特性に即した学習活動である、としているのも遊びの価値を十分強調したものである。

遊びには主体性や余分なことをする自由が保証されなければならない。しかし、早期教育は余分なことを切りつめて効率よく先取り学習しようとするものと見られるから、一般に了解されている幼児教育の在り方と相容れない点を持つことになる。本論は、以上に見た遊びと学習の在り方の問題についてある地方都市での実態の一端にふれながら具体的に考察することを目的としている。そのために近年行われたある質問紙調査を取り上げる。この調査は、遊びや習い事（塾通い・お稽古事・スポーツ教室など）などの実態とそれらに対する養育者の態度や認識及び子どもへのさまざまな期待などを尋ねたものである。

方 法

以下の要領で質問紙調査を行った：【対象】青森県弘前市内の国立大附属X幼稚園と私立Y幼稚園に通う園児の養育者。【時期】幼稚園が夏休みに入る直前の1999年7月。【手続き】在園児全員の養育者への配布を原則として幼稚園を通じて質問紙を配布し、ほぼ1週間後再び幼稚園を通じて回収した。【質問項目】以下の29質問から成る。

A 回答者について；1. 続柄, 2. 職業, 3. 配偶者の職業, 4. 最終学校, 5. 配偶者の最終学校

B 園児について；1. 通園先・学年, 2. 生年月, 3. 性別, 4. きょうだいの数

C 子どもの活動実態；5. 平日帰宅後遊び相手になる人, 6. 遊び相手が友達である場合の相手の数, 相手との関係, 相手の学年, 7. 平日帰宅後の遊び時間, 8. 平日帰宅後の遊び場所, 9. 子どもの遊びの傾向, 10. 習い事の種類, 11. お手伝いの種類

D 子どもへの期待, 幼児教育上の認識など；1. 教育方針の担い手, 2. 期待する進学程度, 3. 期待する職業, 4. 期待する人物像, 5. 子どもの活動への認識, 6. 子どもの遊びとその環境への不満, 7. 子どもの遊びをめぐる問題点, 8. 両親の興味関心の対象, 9. 通園先が力を入れている点, 力を入れて欲しい点 (X園のみ)

結果と考察

X幼稚園から124名 (回収率80.0%), Y幼稚園から172名 (回収率90.5%), 合計296名 (回収率85.8%) の回答があった。以下, 考察を交えながら単純集計結果, クロス集計結果の順に示していく。単純集計結果では, 質問 (及び回答形式) を示した上で結果に移る。この場合基本的にX園, Y園を分けない場合の結果を述べていくこととし, 統計的に園差が認められた場合にのみ両園の資料を分けた結果にふれることにした。クロス集計結果では, 子どもの基本的属性と養育者の期待や教育認識との関連並びに養育者の期待や教育認識と子どもの活動実態との関連に焦点を置いた。結果を簡明に示すため百分率の数値は少数点以下を四捨五入した。また, 有意性の検定はすべてカイ二乗検定法により, 危険率5%以下で行った (単純集計ではカイ二乗値等を省略)。複数の選択が可能な質問は, 選択項目それぞれを独立に分析した。なお, 調査項目B2, D8, D9はスペースの都合で結果を省いた。

◆単純集計結果◆

A 回答者について

A1 [続柄] あなたはお子様の? (父親, 母親, 祖父, 祖母, その他 (記述) ⇐一つ選択) ◇母親95%, 父親4%, 祖母1%となった (回答総数296)。今回の調査はほぼ母親による回答と見てよい。

A2 [職業a] あなたの職業は? (自由記述⇐無職・専業主婦, 非常勤職, 常勤職に事後分類) ◇無職・専業主婦72%, 非常勤職25%, 非常勤職4%

表C2 遊び集団の規模、友達との関係、学年の関係 (%)

| a. 集団の規模 | | | | | | | b. 友達との関係 | | | | | c. 学年の関係 | | |
|----------|----|----|----|----|----|-----|-----------|----|----|----|----|----------|----|----|
| 園 | 2人 | 3人 | 4人 | 5人 | 6人 | 7+人 | 同園 | 近所 | 同胞 | 親戚 | 其他 | 上級 | 同級 | 下級 |
| X | 65 | 72 | 49 | 23 | 10 | 7 | 79 | 64 | 54 | 2 | 8 | 80 | 82 | 43 |
| Y | 30 | 40 | 25 | 12 | 6 | 8 | 45 | 49 | 28 | 2 | 3 | 50 | 50 | 30 |

となった(回答総数296)。無職・専業主婦が回答者の大多数を占めた。

A3[職業b] 配偶者の職業は？(自由記述⇨無職・専業主婦，非常勤職，常勤職に事後分類)⇨常勤職97%，無職2%，非常勤職1%となった(回答総数291)。配偶者は圧倒的に常勤職が多かった。常勤職の内訳は，会社員34%，専門・技術職25%，公務員21%，事務職7%，自営業6%，管理職4%，ほか1%となった。*園差：X園では，専門技術職37%，会社員27%，公務員17%，Y園では会社員39%，公務員24%，専門技術職16%の順となった。

A4[最終学校a] あなたの最終学校は？(中学，高校，高卒後専門学校，短大，大学，大学院⇨一つ選択)⇨高校35%，大学24%，短大23%，専門学校15%，大学院3%，中学0%となった(回答総数295)。*園差：X園では大学，短大，高校(33%，24%，23%)，Y園では高校，短大，大学(44%，22%，18%)の順となった。

A5[最終学校b] 配偶者の最終学校は？(中学，高校，専門学校，短大，大学，大学院⇨一つ選択)⇨大学40%，高校37%，大学院13%，専門学校6%，短大2%，中学1%となった(回答総数289)。回答者(ほぼ母親)よりも配偶者(ほぼ父親)の方が高学歴のようである。*園差：X園では大学，高校，大学院(46%，27%，20%)，Y園では高校，大学，専門学校(45%，36%，9%)の順となった。

B 園児について

B1[学年] お子様が通うのは__組？(組名記述)⇨年少組66名，年中組124名，年長組106名であった(合計296名)。*園差：X園では年少組18名15%，年中組55名44%，年長組51名41%であったのに対してY園はそれぞれ48名28%，69名40%，55名32%であった。次のB2は省略。

B3[性別] お子様の性別は？(男，女⇨一つ選択)⇨男児146名，女児148名とほぼ同数であった(回答総数294)。

B4[同胞] お子様のきょうだいは？(0人，1人，2人，3人以上⇨一つ選択)⇨きょうだい数1

人53%，2人25%，0人15%，3人以上7%となった(回答総数296)。きょうだい1人が過半数を占めた点は少子化傾向を反映していよう。*園差：X園ではきょうだい1人61%，2人20%，0人13%であったのに対してY園はそれぞれ43%，32%，16%であった。

C 子どもの活動実態

C1[遊び相手] 平日(帰宅後)お子様の遊び相手になるのはどんな人ですか？(友達，親，祖父母，同胞(きょうだい)，親戚，その他(記述)⇨いくつでも選択)⇨選択率が高かったのは同胞76%，親75%，友達64%である。祖父母32%もある程度は相手になっているが，親戚4%が相手になることは稀である(それぞれ回答総数295)。帰宅後の遊び相手として家族の役割が大きい。

C2[友達との遊び-C1で友達と遊ぶと回答した者のみ] ◆(a)[友達集団の規模] 遊び友達とは何人で遊びますか？(2人，3人，4人，5人，6人，7人以上⇨いくつでも選択)⇨3人44%，2人36%，4人28%，5人14%，6人6%，7人以上6%となった(それぞれ回答総数295)。両園における遊び友達集団の規模は2～4人が普通であると言えよう。*園差：X園の子どもはY園に比べ比較的小さい集団(2人，3人，4人)で遊ぶ割合が高いようである(表C2a)。◆(b)[友達との関係] その友達は？(同じ幼稚園の子，近所の子，きょうだい，親戚，その他⇨いくつでも選択)⇨近所49%，同じ園45%，きょうだい28%が比較的高い割合を示した(それぞれ回答総数295)。*園差：同じ園，きょうだい，その他，についてはX園の方がY園よりも高率のようである(表C2b)。◆(c)[友達の学年] その友達の学年は？(お子様より上，お子様と同じ，お子様より下⇨いくつでも選択)⇨お子様より上50%，同じ50%，下30%となり，下級生と遊ぶ割合は比較的低かった(それぞれ回答総数295)。*園差：X園の方がY園より上級生並びに同級生と遊ぶ割合が高いようである。(表C2c)。

C3[遊び時間] 平日(帰宅後)遊ぶ時間はどれくらいですか？(ほぼ0分，ほぼ15分，ほぼ30分，ほ

表C3 平日（帰宅後）の遊び時間（単位は分）（%）

| | 園 | 00 | 15 | 30 | 45 | 60 | 90 | 120 | 150 | 180 | 210 | 240+ |
|--------|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|------|
| a 父親と | X : | 40 | 0 | 13 | 24 | 5 | 9 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 |
| | Y : | 23 | 0 | 19 | 22 | 2 | 21 | 2 | 8 | 3 | 1 | 0 |
| b 母親と | X : | 8 | 9 | 23 | 1 | 28 | 5 | 12 | 1 | 5 | 0 | 8 |
| | Y : | 2 | 6 | 34 | 4 | 22 | 5 | 11 | 1 | 5 | 3 | 8 |
| c 子どもと | X : | 5 | 2 | 2 | 1 | 10 | 10 | 18 | 7 | 25 | 3 | 17 |
| | Y : | 4 | 0 | 5 | 0 | 8 | 9 | 33 | 7 | 18 | 3 | 13 |

表C4 平日（帰宅後）の遊び場所（%）

| | 園 | 屋内 | 敷地 | 道路 | 空地 | 公園 | 其他 |
|--------|-----|----|----|----|----|----|----|
| a 父親と | X : | 93 | 35 | 8 | 2 | 13 | 4 |
| | Y : | 91 | 26 | 6 | 1 | 12 | 8 |
| b 母親と | X : | 91 | 44 | 8 | 2 | 32 | 3 |
| | Y : | 97 | 45 | 8 | 1 | 25 | 2 |
| c 子どもと | X : | 72 | 45 | 18 | 9 | 45 | 2 |
| | Y : | 68 | 50 | 18 | 3 | 37 | 3 |

ぼ45分、ほぼ1時間、ほぼ1時間30分、ほぼ2時間、ほぼ2時間30分、ほぼ3時間、ほぼ3時間30分、ほぼ4時間以上（一つ選択）◆（a）[父親と遊ぶ時間] ◇最も高率であったのは、ほぼ0分であり、以下ほぼ30分、ほぼ15分、ほぼ1時間（30%、23%、17%、16%）の順となった（回答総数276）。ほぼ3割の父親が子どもと全く遊んでいないことに注目される。*園差（表C3a）：X園の方がY園よりも「ほぼ0分」すなわち子どもとほとんど遊ばない父親の割合が高く、ほぼ1時間30分すなわち子どもと比較的長く遊ぶ父親の割合は低いようである。◆（b）[母親と遊ぶ時間] ◇ほぼ30分、ほぼ1時間、ほぼ2時間、ほぼ4時間以上（29%、24%、11%、8%）の順に割合が高かった（回答総数291）。母親との遊び時間は父親との遊び時間より長いようである。父親はほとんどが常勤職を持ち、母親はほとんどが無職・専業主婦であることと関連があろう。*園差（表C3b）：比較的差が大きいのはほぼ30分であり、X園ではY園よりも選択率が低かった。◆（c）[子ども同士で遊ぶ時間] ◇選択率が高い順にほぼ2時間、ほぼ3時間、ほぼ4時間以上、ほぼ1時間30分（27%、21%、15%、9%）となった（回答総数273）。子ども同士の遊び時間は母親との遊び時間よりさらに多いようである。子どもと遊ぶ時間は父親が最も少なく、母親はそれよりも多いが、子ども同士の遊ぶ時間がさらに多い。ここで印象的なことは、遊びにおける友達の重要性和「遊ばない父親」である。

C4[遊び場所] 平日（帰宅後）よく遊ぶ場所は

どこですか？（家の中、家の敷地、道路・路地、空き地、近くの公園、その他（二つ選択）◆（a）[父親と遊ぶ場所] ◇家の中が圧倒的に多く、続いて敷地、公園（91%、26%、12%）となった（回答総数245）。父親が平日遊ぶ場所であるから、家の中が最も遊びやすいのは頷けよう。◆（b）[母親と遊ぶ場所] ◇家の中がかなり多く、続いて敷地、公園（94%、44%、27%）となった。父親と同じ傾向であるが、家の中以外の割合がやや高くなっている。*園差：家の中で遊ぶ割合はY園の方がX園より高かった。◆（c）[子ども同士の遊ぶ場所] *家の中、敷地、公園（71%、48%、41%）の順で多く、父親や母親と遊ぶ場合と同様の傾向にあり、家の中で遊ぶ傾向は強い。しかしながら、家の中から離れる割合は一層高くなっている。これは道路18%の選択率が比較的高かった点にも表れている。空き地6%はここでも少ない。*園差：空き地はどちらの園でも遊ぶことの少ない場所であるが、Y園の方が一層低率であった。

要するに、遊ぶ場所は遊び相手を問わず、家の中―敷地―公園―道路―空き地の順に多かった。また、家の中から離れて遊ぶ割合は父親との遊び、母親との遊び、子ども同士の遊びの順に高まっていた。道路、空き地が一貫して少ないことについては交通事情の悪化や空き地の減少などが関連していると思われる。

C5[普段の遊びの傾向] お子様はどちらかといえばどのような遊びが多いですか？◆（a. 家の

表C5 遊びの傾向(%)

| 園 | 屋外 | 単独 | 動的 | 大人 | 創意 | 機械 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| | 28 | 13 | 51 | 14 | 57 | 8 |
| X | 42 | 37 | 43 | 27 | 37 | 50 |
| | 30 | 50 | 7 | 59 | 6 | 42 |
| | 屋内 | 集団 | 静的 | 幼児 | 受容 | 自然 |
| 園 | 屋外 | 単独 | 動的 | 大人 | 創意 | 機械 |
| | 34 | 14 | 61 | 10 | 59 | 7 |
| Y | 41 | 34 | 37 | 34 | 37 | 45 |
| | 25 | 52 | 2 | 56 | 4 | 48 |
| | 屋内 | 集団 | 静的 | 幼児 | 受容 | 自然 |

*屋外－屋内では家の外の遊びと中の遊びを比較
 単独－集団では一人遊びと集団遊びを比較
 動的－静的では身体を動かす遊びとじっとした
 ままの遊びを比較
 大人－幼児では大人との遊びと子ども同士の遊
 びを比較
 創意－受容では創意工夫する遊びと見聞きする
 だけの受容的な遊びを比較
 機械－自然では機械を使う遊びと自然に触れる
 遊びを比較
 *中段の数値は「どちらともいえない」を選んだ
 割合を表す

外での遊びが多い<屋外>、どちらともいえない
 <中間>、家の中での遊びが多い<屋内>⇐一つ
 選択)◇中間41%が最も多く、屋外32%と屋内27%
 がほぼ同じであった(回答総数289)。◆(b. 一
 人で遊ぶことが多い<単独>、どちらともいえない
 <中間>、誰かと遊ぶことが多い<集団>⇐一つ
 選択)◇集団51.4%、中間35.2%、単独13.4%
 という順であった(回答総数290)。集団での遊び
 が多い。◆(c. 体を動かす遊びが多い<動的>、ど
 ちらとも言えない<中間>、じっとしたままの遊
 びが多い<静的>⇐一つ選択)◇動的な遊び57%
 が最も多く、静的な遊び4%は非常に少なかった。
 中間39%がかなりある(回答総数292)。活発な遊
 びが多い傾向を示している。*園差：動的な遊び
 はY園の方がX園より多いようである。◆(d.
 大人との遊びが多い<大人>、どちらともいえない
 <中間>、子どもとの遊びが多い<子ども>⇐一つ
 選択)◇子どもとの遊び57%が最も多かった。
 大人との遊びはわずかに11%であるから子ども
 と遊ぶ傾向が優勢と言えよう。中間は31%であ
 った(回答総数289)。◆(e. 創意工夫する遊びが多
 い<創意>、どちらともいえない<中間>、ほぼ
 見聞きするだけの遊びが多い<受容>⇐一つ選
 択)◇創意工夫する遊び58%が最も多く、受容的
 な遊び5%はわずかしかない。中間は37%であ
 った(回答総数290)。◆(f. 機械を使う遊びが多
 い<機械>、どちらともいえない<中間>、自然
 にふれる遊びが多い<自然>⇐一つ選択)◇自然
 にふれる遊び45%に対して機械を使う遊び7%は
 かなり少なかった(回答総数289)。中間は37%を
 占めた。自然にふれて遊ぶ傾向が優勢なようで
 ある。

以上から優勢な傾向を単純に結合してみると、
 自然の中で、仲間と群れ、創意工夫しながら、活

発に遊ぶ傾向が浮かび上がる。答申に言う「生き
 る力」を阻害するような遊びの実態は認められな
 いようである。ただし、屋内遊びと屋外遊びとが
 ほぼ同率であった点は答申の指摘にやや該当する
 と言えようか。

C6[習い事の実態]お子様はどのような習い事
 に通っていますか？(何もしていない、そろばん、
 水泳、リトミック、学習塾(読み書き算数)、伝統
 舞踊、バレエ、体操、ヴァイオリン、工作・粘土、
 ピアノ、サッカー、習字、英語、絵画、エアロビ
 クス、空手や拳法、その他(記述)⇐いくつでも
 選択)◇何もしていない51%が過半数を占めた。
 習い事をしている者の内訳では、ピアノ28%、水
 泳23%が比較的多く、学習塾(読み書き算数)9%
 などがこれに続いた(それぞれの回答総数261)。
 お稽古事、スポーツ教室が多く、学習塾は比較的
 少ない。*園差：Y園はX園に比べて習い事を何
 もしていない者の割合が高い。また、学習塾、水
 泳、リトミック、伝統舞踊、バレエ、体操、ピア
 ノ、英語に通う者についてはX園の方がより高率
 であった。習い事に通わない者はY園では多数派、
 X園では少数派と言えよう。

C7[手伝いの実態]お子様はふだん家ではどのよ
 うな手伝いをしていますか？(何もしていない、
 家の掃除を手伝う、食事の支度や片づけを手伝う、
 家族の洗濯を手伝う、親の家業を手伝う、小さい
 子の世話を手伝う、お使いをする、その他(記述)
 ⇐いくつでも選択)◇家の手伝いを何もしていな
 い者は17%とかなり少数であった(回答総数291)。
 手伝いの内訳では、食事の支度や片づけ71%が群
 を抜いて多く、これに続いて家の掃除25%と小さ
 い子の世話20%という結果である(それぞれの回
 答総数291)。家業の手伝いすなわち本格的な労働
 の補助2%は全く少なく、何らかの軽い家の手伝

表C6 習い事の種類 (%)

| 園 | X | Y | 知的学習■ | 読み書き算数 | 19 | 1 |
|-----------------|--------|----|-------|--------|----|----|
| | | | | 英語 | 16 | 1 |
| 習い事をしていない | 29 | 59 | お稽古事■ | ピアノ | 41 | 15 |
| 習い事をしている (以下内訳) | 71 | 41 | | ヴァイオリン | 1 | 0 |
| | | | | 絵画 | 0 | 0 |
| スポーツ教室■ | 水泳 | 39 | | 工作・粘土 | 1 | 1 |
| | 体操 | 4 | | バレエ | 11 | 2 |
| | サッカー | 2 | | 伝統舞踊 | 3 | 0 |
| | 空手・拳法 | 1 | | 習字 | 0 | 0 |
| | エアロビクス | 0 | | 算盤 | 2 | 0 |
| | リトミック | 4 | 1 | 其他■ | 3 | 0 |

表D2 期待する進学程度 (%)

| 園 | 中学 | 高校 | 専学 | 短大 | 大学 | 大院 |
|-----|----|----|----|----|----|----|
| X : | 0 | 5 | 3 | 4 | 80 | 8 |
| Y : | 1 | 15 | 8 | 8 | 66 | 2 |

表D3 期待する職業 (%)

| 園 | 会社 | 公務 | 自営 | 医療 | 教育 | 福祉 | 芸能 | 農林 | 法律 | 芸術 | 研究 | 政治 | プロ | 其他 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| X : | 14 | 32 | 6 | 43 | 19 | 12 | 3 | 2 | 7 | 9 | 19 | 0 | 5 | 21 |
| Y : | 19 | 35 | 4 | 29 | 8 | 22 | 3 | 5 | 5 | 7 | 11 | 1 | 8 | 32 |

いをしている者がほとんどである。

D 子どもへの期待と子どもの活動に関する認識

D1 [教育方針の担い手] 教育方針については主にどなたが決めていますか？ (父親, 母親, 祖父, 祖母, その他 (記述) ◀いくつでも選択) ◇教育方針の主な担い手として父親77%, 母親92%が選択された (それぞれの回答総数295)。この両者でほぼ尽きている。母親の占める比重が少し大きいようである。

D2 [期待する進学程度] どの程度まで進学してほしいと思いますか？ (中学まで, 高校まで, 高校卒業専門学校まで, 短大まで, 大学まで, 大学院まで◀一つ選択) ◇大学まで72%が最も多く, これに続く高校まで11%とかなりの差がある (回答総数288)。*園差: 大学までを期待する率は, X園80%, Y園66%とやや開きがある。次に期待が高いのはX園で大学院, Y園で高校である。X園はY園より期待する進学程度が高いと言ってよいであろう (表D2)。

D3 [期待する職業] であればどのような職業についてほしいと思いますか？ (会社員, 公務員, 自営業 (商工), 医療職, 教育職, 福祉職, 芸能人, 農林漁業, 法律職, 芸術家, 研究者, 政治家, プロスポーツ選手◀いくつでも選択) ◇医療職35%

と公務員34%が比較的高率で選択された。これに続いて高率なのはその他28%で, これには「子どもの希望する職業」が数多く含まれた。他に比較的多く期待された職業として福祉職18%と会社員17%がある。昨今の福祉への関心の高まりや不況による安定志向を反映するのであろうか (それぞれの回答総数284)。*園差: 医療職, 教育職, その他の職業への期待ではX園の方が, 福祉職への期待ではY園の方がより高率に見える。期待の高い順に見るとX園では医療職, 公務員, その他, Y園では公務員, その他, 医療職の順になる (表D3)。

D4 [期待する人物像] どのような人になってほしいと思いますか？ (幸せな家庭を作る<幸福>, お金持ちになる<裕福>, 親の職業を継ぐ<世襲>, 仕事で成功する<成功>, 世の中のために尽くす<尽力>, 有名人になる<有名>, 親の面倒をみる<世話>, 皆から好かれる人になる<好感>, その他 (記述) ◀三つ選択) ◇特に多く選択されたのが幸福85%と好感75%であった。これに続いて成功33%と尽力30%がある (それぞれの回答総数295)。

D5 [遊び, 習い事, 仕事に関する認識] 以下のよう考え方 (①~⑦) についてどう思いますか？

表D5 子どもの活動に関する認識（%；賛成－中間－反対）

| 園 | □遊び指導 | □仕事優先 | □学習優先 | □高度学習 | □早期開始 | □自由遊び | □要学習塾 |
|----|----------|----------|----------|----------|----------|--------|----------|
| X： | 48-37-15 | 26-34-41 | 45-37-18 | 28-29-43 | 28-45-27 | 94-6-8 | 17-18-65 |
| Y： | 52-39-9 | 20-35-45 | 41-38-21 | 14-33-53 | 30-45-25 | 96-4-0 | 2-18-80 |

（全く賛成，やや賛成，どちらとも…，やや反対，全く反対⇐一つ選択）

- ①遊びにもよい遊びと悪い遊びがあるからよい遊びをするよう大人の指導が必要＜遊び指導＞
- ②幼稚園期でも家の仕事をする事が大事だから，時間が余ったら遊ぶべき＜仕事優先＞
- ③どんなに楽しく遊んでいても習い事の時間になればやめるべき＜学習優先＞
- ④学習できるなら幼稚園期からでもどんどん高度な学習をさせるべき＜高度学習＞
- ⑤習い事は早く始めるほど上達しやすいので幼稚園期でも早すぎない＜早期開始＞
- ⑥自由に遊ばせ，遊びの中で自然に学ぶのがよく自由遊び＞
- ⑦幼稚園期から進学受験を考え，学習塾に通うのもやむを得ない＜要学習塾＞

以上のうち①～⑤は，「どちらとも…」が最多で，そこから選択肢の両端に向かって百分率が減少していくパターンを示した。一方⑥は賛成度が増すほど，⑦は反対度が増すほど選択率が增大していくパターンであった。つまり，①～⑤は賛否両論のある考え方であるが，⑥と⑦は大方の評価が定まっている考え方と言える。以下ではそれぞれの考え方について意見分布を調べていくが，傾向を明確にするため，全く賛成とやや賛成を合わせて賛成回答，全く反対とやや反対を合わせて反対回答としてまとめている。どちらとも…は中間回答とした。

①遊び指導：遊びは手放しで受容できる活動ではなく，大人の指導が必要であるという考え方を受容するかどうかを見た質問である。これに賛成する考え方には子どもを大人の責任でよい方向に導こうという善意があるが，一方，遊びを大人の統制の下におくことで遊び本来のよさを損なってしまう危険性もあると見られる。即ち，大人公認の遊びは遊びにおける自由さを損ないかねず，子どもにとって面白味のない活動になるおそれがある。◇賛成50%，中間38%，反対12%となり，一般には賛成の多い考え方であろう（回答総数295）。

②仕事優先：子どもの遊びと競合する活動の一つとして家の仕事と考えられる。現代日本ではも

はや廃れた考え方かも知れないが，確認のためとりあげてみた。◇賛成23%，中間34%，反対が43%となり，こうした考え方はどちらかと言えば，もはや少数派のようである（回答総数276）。なお，著者の意図としては家の仕事としてかなり義務的な仕事も含ませて考えたのであるが，C7の手伝いの実態にみるように家業の手伝いをしている子どもはほとんどいない。よって，家の仕事として，子どもの遊びと競合するとは言えない軽い家事手伝い程度のことを考えた回答者が多いと見られる。

③学習優先：子どもの遊びと競合する活動の一つとして習い事がある。ここでは習い事が遊びに対して優先されるという考え方への態度を調べてみた。◇賛成43%，中間38%，反対20%という結果であり，多くの回答者が遊びより習い事を優先させるべきであると考えているように見える（回答総数296）。ただし，この点は単純に解釈できないであろう。通常習い事はスケジュールを立てて行われるが，これは相手先との約束事であるから，習い事に行く決めてある日なら，遊びがどんなに楽しくとも自由にさせておくことは抵抗があるからである。

④高度学習：ここでは学習できるならどんどん学習させるべきであるといういわゆる早期教育的な考え方についての認識を見ることとした。これは以下の⑥の考え方と対照的な考え方，学習の必要性よりも可能性を重視しているから，自然な学習としての遊びと競合するであろう。◇賛成20%，中間31%，反対49%である（回答総数296）。この考え方には反対する回答者が多いと言えよう。

＊園差：X園では賛成28%に対して反対43%であるが，Y園では14%に対して53%となっており，X園に比べて賛成が比較的低率，反対が比較的高率である。どちらかといえばX園の方にこの考え方に賛成する者が多いようである（表D5）。

⑤早期開始：よく「三つ子の魂，百までも」と耳にするが，これは基礎が大事だというだけでなく，何事も早いうちが肝心だという考え方を含むように思われる。早期教育においても，まさにその名の通り，早く早くという傾向が顕著なようである。そこで，④や⑦とともに早期教育を支える

表D6 遊び環境の問題点（%；賛成－中間－反対）

| 園 | □時間不足 | □場所不足 | □仲間不足 | □内容不適切 |
|----|----------|----------|----------|---------|
| X： | 23-35-42 | 55-20-25 | 47-22-31 | 4-34-62 |
| Y： | 17-46-37 | 52-27-21 | 45-33-22 | 4-40-56 |

表D7 遊びをめぐる問題点（%；賛成）

| 園 | □時間 | □場所 | □相手 | □危険 | □生活 | □大人 | □影響 | □学習 | □其他 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| X： | 18 | 57 | 54 | 7 | 17 | 31 | 7 | 2 | 7 |
| Y： | 12 | 62 | 46 | 9 | 12 | 32 | 5 | 1 | 7 |

中心的な考え方の一つと思われるこの考え方を取り上げた。賛成29%，中間45%，反対26%となり，賛成，反対がほぼ同率で，中間が最も優勢になっている（回答総数296）。習い事といってもさまざまあり，早く始める事が有効なものもそうとは言えないものもあろう。これは現時点では賛否いずれも含む議論の多い考え方と見なされる。

⑥自由遊び：これは現行幼稚園教育要領でも唱えられている遊びへの態度であり，多くの幼稚園で受容されている考え方であろうと予想される。賛成95%，中間5%，反対0%となり，この考え方が圧倒的多数で肯定されていることを示している（回答総数296）。

⑦要学習塾：⑥と反対に進学受験に備えて早くから学習塾に通うという早期の学習を重視した考え方であり，旺盛な競争意識を反映しているように思われる。これも早期教育的雰囲気を構成している考え方の一つであろう。賛成9%，中間18%，反対74%となった。幼児期からの学習塾通いには反対が多い。＊園差：。Y園は賛成が2%しかなく，反対は80%とかなりの高率を示したが，X園では同じことが，17%対65%となり，賛成と反対の差が狭まっている。X園はY園よりもこの考え方への賛成が比較的多く反対が比較的小さいようである。

D6〔遊びとその環境についての認識〕（以下の①～④につき）お子様の遊びとその環境についてどのように思いますか？（全く賛成，やや賛成，どちらとも…，やや反対，全く反対⇒一つ選択）
①子どもの遊び時間が十分でない＜時間不足＞
②子どもの遊び場所が十分でない＜場所不足＞
③子どもの遊び相手が十分にいない＜仲間不足＞
④子どものしている遊びが望ましくない＜内容不適切＞

①時間不足：遊び時間は遊びに大きな影響を与える要因の一つである。まとまった時間がとれない

いと仲間遊びも心ゆくまでできないものであるが，それは習い事や家の仕事などに時間を取られることにより遊び時間が大幅に減少あるいは細切れ化するためと見られる。◇ここでもD5と同様賛成，中間，反対の3カテゴリーにまとめた。賛成19%，中間42%，反対39%となった（回答総数293）。遊び時間が足りないとは思わない回答者が多いようである。習い事をしている幼児は半数ほどいるが（C6参照），幼稚園に行っている間は十分遊んでいると見られようし，園から帰った後に習い事をしていても，週当たりの回数によってはさほど遊び時間を削ることにはならないからであろう。＊園差：X園はY園より中間が少なく，賛成と反対が多いようである（表D6）。

②場所不足：遊び場所も遊びに大きな影響を与える要因の一つである。時間があっても場所がなければ遊べない。また，場所があっても，絶えず車などが出入りするといった落ち着いて遊べない事情があれば，遊びも発展しないであろう。△賛成53%，中間24%，反対23%となった（回答総数294）。遊び場所の不足については賛成が過半数に達しており，大方の認めるところである。

③仲間不足：遊べる時間と場所があったとしても一人では遊びも盛り上がらない。やはり遊びは仲間がいてこそ一層楽しくなる。多くの研究が幼児期の遊びは集団で行われることが優勢であるとしており，遊び仲間も遊びの重要な要因の一つである。△賛成46%，中間29%，反対26%となった（回答総数294）。過半数には達していないが，遊び仲間の不足を感じている回答者は比較的多いようである。

④内容が不適切：遊び内容そのものへの認識を尋ねる問いである。遊び半分という言葉があるように，遊びには必ずしも望ましいとは言えない要素があり，よい遊びとよくない遊びという見方も可能である。◇賛成4%，中間38%，反対58%と

表E きょうだいの数による期待、活動傾向の変動（人数、％）

| きょうだい | 医療職への期待あり | 要学習塾への賛成 | 大人との遊びの多さ | 子どもとの遊びの多さ |
|-------|--------------|-------------|-------------|---------------|
| なし： | 42名中7（17％） | 43名中4（9％） | 42名中12（29％） | 42名中12（29％） |
| あり： | 246名中93（38％） | 253名中21（8％） | 247名中21（9％） | 247名中154（62％） |

なった（回答総数294）。回答者の大半は子どものしている遊びが不適切だとは思っていない。ただし、遊びの内容が適切かどうかの判断基準は人によりさまざまであろう。

D 7 [遊びとその環境の問題点の認識] お子様の遊びとその環境についてはどのようなことが問題ですか？（まとまった遊び時間がとれない＜時間＞、近くに安全で十分に広い遊び場所が少ない＜場所＞、近所に適当な年齢の遊び相手がいない＜相手＞、目の届かない所で危ない遊びをする＜危険＞、遊びすぎて生活にけじめがなくなる＜生活＞、子どもを狙う危ない大人がいる＜大人＞、生活習慣の乱れた子どもに影響される＜影響＞、遊んでばかりいて習い事をしなくなる＜学習＞、其他（記述）＜いくつでも選択＞）D 6 の質問を補足する意味で設定した質問である。最も多く問題にされたのは＜場所＞60％であり、次が＜相手＞50％であった。これはD 6 の結果と一致する。第3位に＜大人＞31％が続いたが、これは最近の社会情勢を反映したものであろう。第4位の＜時間＞15％は少数にとどまっており、これもD 6 の結果と一致する。

◆クロス集計結果◆

E 子どもの基本的属性と養育者の期待や教育認識との関連

子どもの基本的属性としては性別、年齢、きょうだい数などがある。今回は少子化時代の子どものたちということを考慮し、きょうだいの有無（一人っ子か否か）という視点を取り上げた。きょうだいの有無と養育者の子どもへの期待や教育認識は関連しているであろうか。

E 1 [きょうだい数と職業への期待] 子どもへの期待として本論では、進学程度、将来の職業、期待される人物像を取り上げたが、意味の明瞭な関連が見出されたのは将来の職業、中でも医療職への期待のみであった。表Eは、きょうだいなしの群は42名、うち7名が医療職を期待されたが、きょうだいありの群は246名、うち93名が医療職を期待された、というように読む。きょうだいなし即ち一人っ子群は医療職を期待されることがきょう

だいあり群よりも有意に低率であった（ $\chi^2=10.64(3)$, $p<.05$ ）。

E 2 [きょうだい数と教育認識] 本論では養育者の教育認識としてC 5 の7つの考え方（遊び指導、仕事優先、学習優先、高度学習、早期学習、自由遊び、要学習塾）に対する賛否を取り上げた。有意な関連が見出された考え方は自由遊びと要学習塾であるが、きょうだいの有無の比較では両群に差はなかった。

E 3 [きょうだい数と活動実態] 子どもの活動実態として考えたのは習い事と遊び（B 9 遊びの傾向）である。遊びの傾向のうち、大人と遊ぶことが多いか否か（どちらともいえない＋子どもと遊ぶことが多い）あるいは逆に子どもと遊ぶことが多いか否か（どちらともいえない＋大人と遊ぶことが多い）という点で有意な関連が見出された。きょうだいなし（一人っ子）群は大人と遊ぶ傾向が高く、子どもと遊ぶ傾向が低かった（ $\chi^2=14.29(1)$, $p<.01$ ）。

F 養育者の期待や教育認識と子どもの活動実態との関連

F a 1 [進学への期待と習い事] 進学への期待は子どもの学習への期待となって学習と競合する遊びなどの活動に影響を与えることが考えられる。ここでは期待する進学程度と子どもの習い事との関連に焦点をおく。なお、進学への期待は園による差が見られたので園別に調べた。X園、Y園いずれにおいても期待する進学程度の違いによってある習い事に通うかどうか異なるという関係は見られなかった。

F a 2 [進学への期待と遊び] ここでは期待する進学程度と遊びの傾向との関係に焦点を当てた。期待する進学程度によって遊びの傾向に違いが見られるといった関係は見られなかった。

F b 1 [職業への期待と習い事] 職業への期待は子どもの学習的な活動と関連するであろうか。職業への期待は14カテゴリーから成る多重回答質問であるので、各カテゴリー毎にクロス集計を行った。その結果、医療職を期待された子はそうでない子よりも学習塾に通う割合が高く、また、教育職を期待された子はそうでない子よりも学習塾に

表F1 (b) 職業への期待及び(c) 期待する人物像と活動実態との関連

| | | | | | |
|-------------------------|-----|----------|--------------------------|-----|----------|
| b 1. 医療職への期待 → 内学習塾に通う | | | b 1. 教育職への期待 → 内学習塾に通う | | |
| あり | 95 | 14 (15%) | あり | 33 | 8 (24%) |
| なし | 181 | 9 (5%) | なし | 243 | 15 (6%) |
| b 2. 公務員への期待 → 内機械を使う遊び | | | b 2. 公務員への期待 → 内自然にふれる遊び | | |
| あり | 95 | 10 (11%) | あり | 95 | 30 (32%) |
| なし | 187 | 10 (5%) | なし | 187 | 98 (52%) |
| c 1. 仕事で成功を期待 → 内水泳を習う | | | | | |
| あり | 96 | 31 (32%) | | | |
| なし | 187 | 29 (16%) | | | |

表F2 (d 1) 高度学習及び要学習塾と習い事との関連 (人数、%)

| | | | | |
|------|-----|----------|----------|----------|
| 高度学習 | | □学習塾 | □ピアノ | □水 泳 |
| 賛成 | 59 | 18 (31%) | 23 (39%) | 19 (32%) |
| 非賛成 | 226 | 6 (6%) | 51 (23%) | 41 (18%) |
| 要学習塾 | | □学習塾 | □英 語 | □ピアノ |
| 賛成 | 25 | 10 (40%) | 5 (20%) | 14 (56%) |
| 非賛成 | 259 | 14 (5%) | 15 (6%) | 60 (23%) |

通う割合が高かった ($\chi^2=7.78(1), p<.01$; $12.42(1), p<.01$)。職業への期待と習い事とは比較的関連が強いようである (表F1)。

F b 2 [職業への期待と遊び] 職業への期待が習い事に通う割合に影響しているのであれば、習い事と競合関係にある遊びにも何らかの影響があると見られる。公務員への期待と自然にふれる遊びが多いか否か (中間+機械を使う遊びが多い) との間に有意な関連が見られた ($\chi^2=11.65(1), p<.01$)、公務員を期待された者はそうでない者に比べて自然にふれる遊びが比較的少ないという結果である。これは単純には了解しにくい。

F c 1 [期待する人物像と習い事] 期待する人物像は9カテゴリーから成る多重回答質問であるから各カテゴリー毎に分析した。統計的に有意で比較的了解しやすい関連は1点見出された: 仕事で成功するよう期待された者はそうでない者よりも水泳を習う割合が高いという結果である ($\chi^2=10.70(1), p<.01$)。水泳を習う理由としては健康のためということが多いであろう。健康への配慮は仕事で成功することと基本的に関連があると考えらるならその結びつきは了解の範囲内である。人物期待と習い事との関連はある程度期待してよさそうである。

F c 2 [期待する人物像と遊び] 期待する人物像と遊びの傾向との統計的に有意な関連は見出されたが、形式的な関連にすぎないと思われ、ある程度了解可能な関連は見当たらなかった。

F d 1 [養育者の教育認識と習い事] 以下の①～

⑦の考え方に対する態度の違いと習い事 (比較的通わせている割合が高かった学習塾、ピアノ、水泳) との関連に焦点を置いた。①遊び指導, ②仕事優先, ③学習優先, ⑤早期開始, ⑥自由遊びの考え方と習い事との間に有意な関連は見られなかった。

④高度学習に関しては、学習塾 (読み書き算数)、ピアノ、水泳の3項目が関連した ($\chi^2=47.84(4), p<.01$; $12.73(4), p<.05$; $16.84(4), p<.05$)。高度学習賛成者は非賛成者 (中間+反対) に比べて学習塾、ピアノ、水泳を習わせている割合が高い ($\chi^2=46.83(1), p<.01$; $6.56(1), p<.05$; $5.48(1), p<.05$) (表F2)。学習塾、ピアノ、水泳はそれぞれ知的学習、お稽古事、スポーツ教室のジャンルで代表的な習い事であった。

⑦要学習塾に関しては、学習塾、ピアノ、英語の4項目が関連した ($\chi^2=66.95(4), p<.01$; $17.31(4), p<.05$; $22.32(4), p<.01$)。要学習塾という考え方に賛成の者は非賛成者 (中間+反対) に比べて学習塾、英語、ピアノ、に通う割合が高かった ($\chi^2=35.27(1), p<.01$; $7.08(1), p<.01$; $12.86(1), p<.01$)。

以上、習い事と関連が深い考え方としては、高度学習及び要学習塾が挙げられるようである。

F d 2 [養育者の教育認識と遊びの関連] ここでは、教育認識と遊びの傾向との関連に焦点を置いた。⑥自由遊びは、屋内で遊ぶことが多い～屋内で遊ぶことが多い、機械を使う遊びが多い～自然にふれる遊びが多いという2つの傾向に、⑦要学

表 F3 (d2) 自由遊びと遊びの傾向との関連 (人数、%)

| 自由遊び | | 屋 外 | 機 械 | 自 然 |
|------|-----|----------|---------|-----------|
| 賛成 | 274 | 90 (33%) | 17 (6%) | 130 (47%) |
| 非賛成 | 15 | 1 (7%) | 4 (27%) | 1 (7%) |

習塾は、機械を使う遊びが多い～自然にふれる遊びが多いという傾向に有意に関連した ($\chi^2=13.92$, (6), $p<.05$; 31.36 (6), $p<.01$)。

さらに遊びの傾向を屋外か非屋外(中間+屋内)かにまとめて検定したところ、自由遊びという考え方に賛成する者はそうでない者よりも子どもが屋外遊びをする傾向が比較的高かった ($\chi^2=4.52$, (1), $p<.05$)。また、同様に機械を使う遊びをする傾向が比較的低く、自然にふれる遊びをする傾向が比較的高かった ($\chi^2=8.84$, (1), $p<.01$; 9.45 (1), $p<.01$) (表 F3)。

以上から遊びの傾向と関連の深い考え方として自由遊びが挙げられる。

結 論

本論では、幼児期の学習(早期教育即ち知的に偏った早期学習の隆盛, 早期教育的雰囲気蔓延)という問題を介在させながら、幼児の遊び(遊びの機会の減少, 屋内での孤立型の遊びの隆盛, 遊びの情報化(疑似体験化, 虚構化)と親の在り方(遊べない親・遊ばせない親)との関連を問題にし、ある地方都市での実態の一端から幼児教育の置かれている現状をとらえようとした。

幼児の遊びについて: 平日(帰宅後)の遊び時間としては子ども同士の場合ほぼ2, 3, 4時間が多い(合計63%)という点から見ると、全体として遊び時間が少ない訳ではないと思われる。実際、遊び時間の不足を問題にする養育者の割合は少なかった(19%)。ただし、子ども同士の遊び時間がほぼ0, 15, 30分という子どもも少数見られ(合計9%), こうした子どもの場合は確かに遊びの機会が少ないといえる。

次に、屋内での孤立型の遊びはどの程度見られたであろうか。平日(帰宅後)の友達同士の遊び場所を見ると、家の中が最も多く(38%), ついで敷地(26%)と公園(22%)の順になっている点、屋外で遊ぶ傾向と屋内で遊ぶ傾向がほぼ同じ程度になっている点を見ると、屋内で遊んでいる子どもは確かに多いと言えよう。しかし、孤立型の遊びについては、単独の遊びをする傾向(14%)と集団の遊びをする傾向(50%)を比べて見れば、

孤立型の遊びが多いとは言えない。なお、孤立型の遊びというときには、単に一人で遊ぶというだけでなく、テレビ視聴やテレビゲームをして遊ぶという意味も含まれよう。しかし、受容するだけの遊びをしがちな者、機械を使う遊びをしがちな者、じっとしたままの遊びをしがちな者と見られたのはそれぞれ6%, 8%, 2%に過ぎなかった。この割合から見ると、ごく少数そうした傾向に該当する者が存在するにしても、全体として孤立型の遊びが多いという傾向は見られなかったと言ってよい。遊びの情報化という傾向についても同様に判断されよう。

親の在り方について: 子どもと遊べない親については父親が問題であろう。平日(帰宅後)の遊び時間は父親との遊びの場合ほぼ0分が最も多かった(30%)。母親で遊び時間がほぼ0分は5%であったので、ほとんどの母親は何ほどかは子どもと遊んでいると言えよう。なお、どちらの親にしても祝祭日にたくさん遊んでいるという可能性はある。

遊ばせない親ということであれば、遊びと競合する習い事の実態にふれる必要がある。習い事をしているのはほぼ半数(49%)であった。この数値はどう判断すべきであろうか。ベネッセ教育研究所「幼児の生活アンケート報告書」(2000)が2000年2月に(1995年2月に行ったほぼ同じ調査の結果と対比させてある)1歳6ヶ月～6歳11ヶ月の子どもの保護者を対象とした質問紙調査を行っている。それによると習い事をしている者(通信教育を含む)は、3歳11ヶ月～6歳11ヶ月全体で59.8%(首都圏と富山市, 大分市)であった。弘前市の2幼稚園を対象とした今回の結果はこのベネッセ教育研究所のものと比べて低率であるが、おそらく首都圏だけの数値と比較すればもっと差があるのではないかと推測される。なお、X園とY園(71%と41%)との差に留意しなければならない。X園は首都圏の傾向に近い。この園は国立大学附属幼稚園であり、回答者の最終学校もY園より高い傾向があった。一方、Y園はより弘前市内の平均的な幼稚園に近いと見られるが、この園で習い事をする者は首都圏の数値に比べるとかな

り低率である。こうして、X園の回答者の方に遊ばせない要素が多いように見える。ただし、習い事といってもどれだけの時間を使っているかが把握されないとはっきりしたことは言えない。

遊ばせない親という問題の中核は何であろうか？ここでは、毎日の生活の中で子どもへの対応に影響を与える源泉としての親の期待や教育認識に目を向ける。医療職または教育職への期待と学習塾通いとの関連及び仕事で成功することへの期待と水泳教室通いとの関連が認められた。このことからあまり多くのことを引き出そうとすべきではないが、親の期待と子どもの習い事とが多少とも関連をもっていることに一層の確信をもたらすものであろう。一方、職業への期待と遊びの傾向との関連は一部有意であったが、その意味があまり明確でなかった。

教育認識と習い事との関連については、「高度学習」と「要学習塾」が子どもに習い事をさせることに関連の深い考え方であることが分かった。一方、「自由遊び」と屋外の遊び、自然にふれる遊びとの関連、「要学習塾」と機械を使う遊びとの関連も見出された。自由遊びが子どもに多くの自主性を認めようとする考え方であるとする、子どもの生活にあまり干渉しない態度になるから、子ども同士の遊びを奨励する結果になろう。そうした場合自然の成り行きが屋外での遊び、自然にふれる遊びということなのであろう。要学習塾はその逆に子どもの生活に干渉を加えやすい態度になろう。それは子ども同士の遊びの機会を減少させ、結果として孤立型の機械を使う遊びをもたらすと考えられる。ただし、もっと多くの標本を用いた調査によって確認しなければならない。

最後に、今回の調査と著者による前回の調査(菅

野, 2000)³⁾との比較にふれておく。この調査は、実施時期が今回調査の10年前にあたるが、弘前市近郊の幼稚園などに通う子どもの親を対象に遊びと習い事の実態及び遊びに対する親の制限の実態を調べたものであり、遊びに対する親の直接的な規制に目を向けた点こそ今回と異なるものの、活動の実態に関する点は今回調査の基礎をなしたと言ってよい。結果を比較すると、遊び時間、遊び場所、遊び相手の点では今回も前回と類似した結果を示したが、習い事をしていない者の割合という点では前回よりも低率になったようである(特にX園)。全体としては、今回も前回と同様答申で指摘されるような問題傾向は認められなかったと言えよう。大都市圏の状況と地方の状況とは区別しなければならないことがより明らかになった。

引用文献

- 1) 明石要一(編) 中教審「心の教育」答申読本, 教育開発研究所, 1998年。
- 2) 加藤繁美 早期教育が育てる力, 奪うもの, ひとなる書房, 1995年。
- 3) 菅野幸宏 幼児・児童の遊びに関する実態調査, 弘前大学教育学部研究紀要クロスロード, 第1号(通巻第41号), 2000年。
- 4) 須藤敏昭 現代っ子の遊びと生活, 青木書店, 1991年。
- 5) 高良聖(編著) 警告! 早期教育が危ないー臨床現場からの報告, 日本評論社, 1996年。
- 6) ベネッセ教育研究所 第2回幼児の生活アンケート報告書, 研究所報 Vol.1.22, (株)ベネッセコーポレーション, 2000年。
- 7) 無藤隆 早期教育を考える, 日本放送出版協会, 1998年。

(2002. 1. 15受理)